

協力機関 & 研修監理員に聞く！ / 研修のちょっと

イイ話

日本での研修を支える縁の下の力持ち。
それが日本ならではの強みを持つ「協力機関」と、
現場でサポートする「研修監理員」※だ。
彼らが語る研修のエピソードとは。

※研修に同行し、講義や視察先での通訳をはじめ、講師や協力機関との調整、
研修員のケアなど、研修を円滑に進める役割を担う業務。

研修監理員①

ナリマニ・ハッサンアリさん

知識をつなぐ 懸け橋になりたい



地域振興をテーマにした研修で通訳をするナリマニさん(左端)

イランから日本に来て約25年のナリマニさん。翻訳や通訳の経験を生かし、人の役に立つ仕事がしたいと研修監理員に。担当する研修テーマは幅広く、事前の情報収集は必須だ。「講義の内容を研修員に正しく伝えるには、文化の違いを踏まえて訳さなければなりません」と話す。

例えば、水資源管理がテーマの研修で「かんがい施設を住民で共同管理すると効果的」と伝えるだけでは、「それは日本だからできること」と思われてしまう。水が豊富だからこ協力し合える日本と、降水量が日本の7分の1のイランでは状況が違うからだ。そうした国ごとの考え方の違いを伝えた上で、イランで取り入れられる工夫を導き出せるよう、知識のキャッチボールを取り持つ役割を果たしている。

このナリマニさんの姿勢は、「情報が正確に伝わる」と評価が高い。「先日、通訳の仕事でイランを訪れた時、空港で“ナリマニさん!”と声をかけてくれたのは、なんと何年も前に来日した研修員でした。覚えていてくれたなんてうれしかったです。まさに日本とイラン、そしてアフガニスタンをつなぐ懸け橋となっている。



担当言語：ペルシャ語、ダリー語
担当研修テーマ：廃棄物管理、水資源管理、防災など
担当国：イラン、アフガニスタン

協力機関①

世羅高原6次産業推進協議会

人と人をつなぐ農業を 世界に



アフリカ諸国からの研修員がナン畑を視察し、地域の人々と交流

広島県中央部に位置する世羅町は、県内有数のコメの生産地。しかし、農家一軒当たりの耕作面積が小さく、後継者も減る一方だった。そこで「地域一丸となって町を盛り上げたい」と、地元の農家1,400人をつなぐネットワークの構築を目指して発足したのが「世羅高原6次産業推進協議会」だ。

6次産業とは、農業(第1次産業)、加工(第2次産業)、販売・流通(第3次産業)を融合して新たなものを生み出す産業。ナン農家と駅伝強豪校が連携してスポーツドリンクを開発したり、手作りの漬物や味噌などを女性グループが加工・販売したり、花の観光農園を町全域に広げたり…。このような取り組みが成功し、年間160万人もの観光客が訪れる魅力ある町になった。

そんな世羅町は、地域振興などをテーマとした研修の視察先の常連。一番の売りは、町内の多様なアクターの連携だ。「“みんなの知恵を出し合って新たなビジネスチャンス”という私たちのキャッチフレーズに感激し、自分の国でも使いたい!と言われたことも。世羅町が開発途上国のモデルになり得ると自信になりました」と和泉さん。小さな町から世界を変える大きな力を発信している。



担当者：世羅町産業観光課 和泉美智子さん
担当研修テーマ：中小企業振興、女性の起業支援など
受入地域：中南米、東欧、アフリカ

研修監理員②

福原康太さん

祖国の平和のために できること



沖縄県立博物館・美術館で展示方法を学ぶ

実は、福原さんの祖国はカンボジアだ。内戦のためタイの難民キャンプに逃れ、国際機関の支援により13歳で来日。日本への恩返しと、祖国のために自分ができることはないか。その思いを同時にかなえられる仕事が、研修監理員だった。

担当する研修テーマの一つが、平和発信の拠点として、多くの人々に活用してもらえ博物館の整備。その舞台は沖縄だ。ポル・ポト時代の負の遺産を後世に伝え、平和の大切さを広めたいカンボジアにとって、同じく戦争の悲劇を経験した沖縄と共有できることは多い。沖縄県立博物館・美術館では情報を分かりやすく伝える写真の展示方法や傷みやすい紙文書の保存技術を、沖縄県平和祈念資料館では沖縄戦の歴史を学んでいる。「沖縄での研修を通じて“過去の過ちを二度と繰り返してはならない”と再認識し、カンボジアに戻って奮闘する研修員を見ているとうれしくなります」と話す。

自分が担当した研修に参加した彼らが、平和を願い新しい国づくりを進めてくれる。それが福原さんのエネルギー源だ。



担当言語：カンボジア語
担当研修テーマ：上下水道整備、地方行政、平和構築など
担当国：カンボジア

協力機関②

鳴門教育大学

海を超える 日本の教育ノウハウ



研修員がアイデアを出し合い、生徒に分かりやすい授業内容を考える

徳島県の鳴門教育大学教員教育国際協力センターでは、開発途上国での参加型授業の推進を目指し、理数科を中心に教員を対象にした研修を実施している。「小学校で楽しそうに意見交換する日本の子どもたちの姿を見て、まず研修員たちは驚きます。アフリカ諸国などでは、授業中に生徒が話すこと=規律が守られていないというイメージが強いからです。でも、子どもたちにとってクラスメイトと考えを共有することも大切な学び。それを日本の現場で実感されているようです」と小澤さんは話す。

何よりもうれしいのは、日本での学びを帰国後に実践していると研修員から聞いた時。研修で紹介した授業内容を取り入れたり、生徒の反応を記録する「授業観察シート」を教員養成機関の職員がモニタリングに使ったりと、自国の授業改善に生かしているという。

鳴門教育大学の学生が研修員と触れ合う機会も多く、日本の若者たちがさまざまな国の教育事情を知り、視野を広げる良いきっかけにもなっている。



担当者：国際教育コース/教員教育国際協力センター 小澤大成さん
担当研修テーマ：理数科教員養成など
受入地域：アフリカ、大洋州、アジア、中東など